

春宮千鐵先生の人と業績

竹 尾 隆

神奈川大学法学部客員教授春宮千鐵先生は、明治三九年一月二四日、御尊父祐一郎氏、御尊母とう女史の御長男として、東京市に出生された。御実家は、長野県屈指の素封家である。先生は、昭和六年三月十日、東京帝国大学法学部政治学科を卒業された。

東大卒業と同時に、先生は、法政大学法学部堀真琴研究室において、政治学及び憲法学の研究生活に入られた。以来、今日に至るまで、先生は、中国からの引き揚げ前後の僅かの期間を除き、一貫して学究生活を続けられている。凡そ半世紀にも及ぶこうした先生の学究生活の歴史を縫いとる一筋の緯糸があるとしたら、それは、先生と深い親交のある辻清明東大名誉教授が明快に指摘されたように、本質的にリベラルな立場への確信とということができるのである。このことは、先生御自身のメモワールのなかに、「私は、生来、円満で、妥協的で弱い性格である。しかし、いばる人間にはどうもがまんがならなかった。権力とか権力者を好きになれないのは、私の生れながらの性格である」と記されている事実にも、覗かれる。このようなリベラリズムへの確信を生みだすだけの精神的風土は、先生の幼少期に逸早く準備されていたといつてよい。いかえれば、こうしたリベラリズムへの確信は、御実家の環境、御両親の訓育、信州の風土と信州人としての気質などが、それぞれ微妙に絡み合い、響き合って、比較的に幼少期に、い

わば地下の潜流として形成されたものとおもわれる。このような地下の潜流は、その後における二つの経験的事実を好固の刺戟剤として一挙に地上に噴出し、一つの大きいなる奔流へと転化するに至ったのである。

そうした経験的事実の一つは、先生が東大時代に、吉野作造博士に学ばれたことである。前述のメモワールには、この点について、次のように述べられている。

「私の学生時代、政治史を故吉野作造先生に教えられた。大正デモクラシーの光輝ある指導者としての、その、*「デモ造」*という呼称は、当時はまだ記憶に生々しかった。先生は、東大教授ではなくて、東大講師である。先生は、政治史に臨床学の必要を強調され、現実の政治のなかに症例を見出してこれを説かれた。理論やイデオロギーとして政治を講ずる学者よりも、ずっと穏健な吉野先生の方が、時の軍部にいたくにくまれたのは、この臨床家としての政治史学にあったのである。その先生が、張作霖爆死事件と引きつづいての軍の満州出兵に対して、大学教授としてよりも、大衆運動家としての真価を発揮されてこれに頑強な反対の態度をとられた。こうした先生の言動に全幅の共鳴を捧げた私等一〇人ほどの学生は、先生を介して中国語を学習するまでになった。後年の私の中国語の基礎が、ここにあったのである」。

吉野作造博士の民主主義の主張を一つの強力な触媒として、先生の意識の底層に伏流していたリベリズムへの確信は、外見上の休火山の突然の噴出のごとく、そのエネルギーを急激に凝集させ発現させることになったのである。

もう一つの経験的事実は、戦時下の一〇年にわたる中国生活である。この中国生活は、先生のリベリズムへの確信を圧殺するよりは、むしろ、一段と牢固なものにしたと考えてよい。歴史の主調音が圧倒的に軍国主義的であった昭和一〇年代に、リベリズムの立場を堅持し通すことは、確かに至難であった。けれども、先生の場合、軍部に対する批判と反抗とを大きな原動力として、リベリズムへの確信は、内に深く沈潜しつつも、恰も大地の底で爆発し

たかのような高密度をみせるに至ったのである。先生のメモワールには、このことは、次のように書かれている。

「私は、昭和九年末、上海の東亜同文書院に赴任することが決まった。同文書院といっても、今日では五〇歳以下の人には殆んど知られていない。今の愛知大学の前身である。三年ほど前、何かの雑誌で、同文書院の紹介をしたものがあつたが、日本の大陸進攻の尖兵位にしか評価してくれなかった。こういう一面も確かにある。特に日中戦争の際、進んで従軍してゆく学生を必死で止めようとした私が、ともすれば同文書院内で非国民扱いされたことでもわかるが、しかし、そうしたことは大人の政治屋のやったことである。学生は、実に純粹であつた。昭和一四年、春休のある日、突然、東大の野村淳治先生が、拙宅を訪問された。そして、軍からの依頼で北京に新官吏養成機関として、満州の大同学院、また、華中の維新学院と並んで、新民学院を作ることになったので、その教授部長として赴任しようと思うのだがどうだろうか、ということである。私は、この野村先生にそんな気迫があつたのかと驚きもしたが、同時にあまりにも現実を知らなすぎるとも思い、極力反対したが、よく承ってみると、既に承諾されたのだということである。では何のためにわざわざ拙宅まで来られたのか、先生の御気持はよくわかつた。私は、同じ年の九月、北京の新民学院に移つた。このことが、しかし、却つて先生のマイナスにもなり、先生も私も、均しく学者生活を根底から破壊されることになった。私はもちろん、特に野村先生は思想穩健で、いささかも反体制的思想を抱くものではない。しかし、象牙の塔を離れて軍と直接の関係に入った時には、オールドリベラリストとして人間の尊嚴を信ずるヒューマニズムの精神は、反逆にも通ずる。明治人間の土根性は、また悲劇でもあつた。先生は北京を去られたが、私は、先生のたつての要請によつて北京へ残つた。それから、受難の連続であつた。第一回の衝突は、私の報告書について、陸軍省軍務局と現地参謀との意見の対立から生じた。軍を誹謗したとする異端の烙印を受けることは、當時においてはとりもなおさず死刑と直結する。幸い、北支興亜院には大学で同窓の仲の良かった人が、政務課長と財

務課長にいた。財務課長は、後の大蔵大臣愛知揆一君である。院の長官塩沢中将の直筆による註釈入りの私の報告書を見せてもらった。野村先生がおられたら、私も、あのような現地軍の中国住民への政策を、否定的に批判しなかつたらう。糸の切れた凧のように、生来の地金が露出してきた。

昭和一八年二月末、気温零下十数度に達する厳寒の真夜中、領警二名、憲兵二名により突然たたき起された。と同時に、憲兵隊への同行を求められた。これについて行ったら、底知れぬ闇に引き込まれて万事休すである。私は、一世一代の大芝居をうった。即ち、私は、陸軍省の囑託であり、少佐相当官である（これらはいずれも大うそ）。従って、正規の手続をふまなければ出頭できない。よって、明日、新民学院において正式に会見しようということで、お引き取りを願った。翌日学院副院長、陸軍中将佐藤三郎閣下の一喝をくって、彼らは、退散してしまった。以後、領警の完全な監視の下に置かれた。時々、茶目気を出して宿泊先を無断変更し、刑事をあわてさせた。この一八年の拘引騒ぎの嫌疑がいったい何であったのか、未だにはっきりしない。犯人逃亡幫助とか、スパイ容疑というだけである。

昭和二十年、終戦の年、六月一五日、赤紙が来た。新兵として訓練されながらアメリカ赤痢に患い骨と皮ばかりになったが、よく死ななかつたものだ。終戦後、現地除隊となって天津まで済南から歩いて帰る途中、同行の人達と相談してにわかにならざるに道を変更し、中共地区へ逃げ込んで共産党（八路軍）の保護を求めた。中国滞在の十年間で、はじめて真の中国人の姿をみたような気がして、今でもこの感激は忘れられない。中国の解放は近いということを確信した。ただ天津を目前に彼らと別れる時、私一人が呼びだされて、ここに残るように熱心に勧められた時には、いささか困った。北京に着いてみると、そこにはかつてのおごれる醜い日本人の影も形もなかった。「好鉄不打釘、好人不当兵」という中国の故事を引用して涙を流してくれた張教授の最後の言葉は、今も耳に残っている。「もう日本は敗ける。しかし、敗けても貴下には帰る国がある。しかし、私達はどうなるのだろうか。帰る所もない」と。彼のそ

の後の運命は知らない。」

若干長きにわたって引用した右の一文に明らかのように、戦時という異常に苛酷な状況の下においても、先生のリベラリズムへの確信は、いささかも動揺することなく、むしろ、内面へと奥深く潜行し、その凝縮の度合いを一層強化するに至ったといつてよい。軍国主義体制に固く編成されざるを得なかった当時における先生の現実生活の背後にあって、絶えず鳴り響いていた基調音が、ほかならぬリベラリズムへの確信であった。それは、軍靴の音にかき消されることなく、静かな底流として先生の意識内の奥深くに脈博を打ち続けていたのである。戦時下における先生の学究生活は、こうしたリベラリズムへの確信という揺がぬ底層に支えられていたといえよう。

このようにして、リベラリズムへの確信は、先生の学究生活を貫ぬく中核的衝動であったということができよう。このリベラリズムへの確信は、戦後における民主主義体制の成立を飛躍の翼として、急激に開花し、豊かな結実の収穫を迎えるに至ったのである。

昭和二十一年五月四日、先生は佐世保へ引き揚げられ、十年にわたる中国生活に終止符を打たれた。佐世保に上陸されて故国の土に第一歩を印されたときの感懐を、先生のメモワールは次のように伝えている。

「昭和二十一年五月四日、中国大陸からの引揚船もようやく終盤を迎える頃、大きなリュックサックを背後にぶら下げて、いわゆる引揚者の典型を思わせる一人の中年の男が、大日本帝国の軍港佐世保港の棧橋に下りた。上陸と同時に頭からDDTを思い切りかけられ、金一千円を頂戴することで、国家は、その男に別離を告げた。かつて全体を見ることは不可能であった美しい佐世保の海に星条旗だけが、揺れ動いていた。これを放心したように見つめていたのが、私である。この引き揚げとともに、私の半生のすべてを大陸に置いてきてしまった。あまり思い出したくもないというのが、私のいつわらない心情である」。

中国から引き揚げられて先生の眼に最初に映じた故国の軍港の姿は、いまやはっきりと過去に送りこまれ息の根をとめられてしまった軍国日本の遺物を象徴する以外の何ものでもなかった。生来のリベラリストである先生にとつて、軍国日本の消滅は、何の感傷も呼び起さなかったとみてよい。むしろ、先生の場合、日本の敗戦は、廢墟の上に新しい民主主義時代の到来を告げる輝しい序曲であったといつてよからう。それ故、引き揚げに伴う心身の疲労が医されるとともに、先生は、再び学究生活に戻られ、意欲的な研究活動を積極的に展開されたのである。

先生は、引き揚げ後四ヶ月の二十一年九月に東京大学法学部研究室に入られ、ここを戦後における再開学究生活の原点とされた。次いで、同年十二月一日に、法政大学法学部、専修大学法学部の講師を委嘱され、二十四年四月一日に、中央労働学園大学教授兼学部長に就任された。そして二十七年四月一日に神奈川大学法学部教授に転ぜられ、憲法学、政治学を担当されることになった。神奈川大学においては、先生は、四十三年十月二十二日から十一月三〇日まで、法学部長代理、四十五年七月二十七日から四十六年一月三十一日までと、四六年五月十九日から四八年五月十日まで、二期連続して法学部長を歴任された。さらに、四十九年五月三〇日から五〇年九月二十二日まで理事として学内行政の任に当られた。そして、五十一年三月三十一日に、先生は、神奈川大学を定年退職され、現在は同大学客員教授として政治学原論を担当されている。

右のごとき多忙な状況の下にあつても、先生の著作活動は、停滞することなく着実に進展した。その主要な著書をあげるならば、二十四年「政治学概論」(上下)(学精社)、二十八年「政治学序説」(学精社)、三十年「現代政治過程論」(中央書房)、三十三年「政治学の基本問題」(中央書房)、四十一年「政治学講義」(中央書房)、などが、これに当る。これらの主要な著作を横に連接してゆく一筋の糸が織りだされるとしたら、それは、改めて指摘するまでもないが、リベラリズムへの深い確信を不動の基軸とする民主政治擁護の論理である。これらの著作の具体的な内容や構成

には、それぞれ、移り変りがみられるにしても、そこには、恰も一つのテーマに基づく一連の円舞曲とでもいうように、おのずから一貫する基本の音調が、保ち続けられている。この音調こそ、まさしく民主政治擁護の論理にほかならない。

春宮千鐵先生は、神奈川大学を退職された後も、御元気で週一回同大学に出講されている。そして先生のリベラリズムへの確信は、今日に至るもいささかも衰えることなく、先生の胸奥深く鮮烈に燃え続けているといつてよい。今後も、益々御壮健で御研究を発展され、また、後輩に親しく御指導・御鞭撻を賜わらんことを心から祈念して擱筆したいとおもう。